

ワールドカップサッカー・南アフリカ大会と国民イメージ(1) : 国民イメージの変化

佐久間 勲, 日吉 昭彦

2010 FIFA World Cup South Africa and images of national people (1) : Change of images of national people.

Isao Sakuma and Akihiko Hiyoshi

Abstract

We examined the impact of 2010 FIFA World Cup South Africa on the images of some national people. Six-hundred and forty-seven Japanese undergraduate students participated in questionnaire survey before and after FIFA World Cup. Participants rated images of some national people on warmth, intellectual ability, and physical ability dimensions. It was found that images of most national people changed positively, but a few images changed negatively. Partial correlation analysis revealed that images of South African, Ivorian, Cameroonian, Mexican, Brazilian and Argentine on intellectual ability dimension were correlated negatively with images of them on physical ability dimension when images of them on warmth dimension were statistically controlled. These results suggest that international sports events make most of images of national people positive, and African and south American were stereotyped as "high physical ability but not intellectual people".

問題

本研究は、2010年に開催されたワールドカップサッカー・南アフリカ大会(以下、W杯南アフリカ大会)の前後で日本人を含む諸外国人に対するイメージが変化するか実証的に検討する。この検討を通して、国際的スポーツイベントが国民イメージの形成・変化に及ぼす影響について考察する。

オリンピック大会やワールドカップサッカー大会などの国際的スポーツイベントは、多くの人々が関心を持ち、注目するものである。大会期間中はテレビや新聞などのマスメディアを通して、さまざまな国民に関する情報が大量に報道される。こうした報道が、さまざまな国民に対するイメージの形成・変化に影響する可能性は十分に予想される。実際に、国際的スポーツイベントと国民イメージに関する先行研究では、国際的スポーツイベントの開催の前後で国民イメージが変化することを繰り返し見出している(藤島・村田・伊藤・佐久間, 1998; 樋口・村田・稲葉・向田・佐久間・高林, 2005; 黄・日吉, 2009; 上瀬・萩原, 2003; 上瀬・萩原・李, 2010; Luo, Chwen, Cinzia, Hiyoshi, Hwang, & Kodama, 2010; 向田・坂元・村田・高木, 2001; 向田・坂元・高木・村田, 2007; Sakamoto, Murata, & Takaki, 1999; 佐久間・藤島・高林, 2007; 佐久間・八ッ橋・李,

2010；高林・村田・稲葉・向田・佐久間・樋口，2005；高木・坂元，1991)。そして、その大半は肯定的な方向への変化である一方、少数ながら否定的な方向への変化も確認されている。本研究も、これらの先行研究に引き続き、国際的スポーツイベントである W 杯南アフリカ大会の開催の前後で、国民イメージが変化するか実証的に検討することを第一の目的とする。そして国際的スポーツイベントが国民イメージに及ぼす影響に関するデータを蓄積し、これまでに得られた知見がどの程度、頑健なものであるか考察する。

国民イメージの変化を検討するときに、そのイメージをどのようにとらえるか考える必要がある。この問題を考えるときに、国民イメージと関連が深い概念であるステレオタイプに関する研究領域の知見が参考になるだろう。近年のステレオタイプに関する研究では、ステレオタイプをあたたかさ（知能）と知的能力の2つの次元でとらえることができるというステレオタイプ内容モデル(stereotype content model)が提唱されている(Cuddy, Fiske, & Glick, 2008；Fiske, Cuddy, Glick, & Xu, 2002)。こうした Fiske ら(Cuddy et al., 2008；Fiske et al., 2002)の議論に基づき、国際的スポーツイベントと国民イメージに関する先行研究でも、国民イメージには複数の次元があることを仮定して、その変化を検討している。そして複数の次元のうちのある次元だけで変化していること、さらにはある次元が肯定的に変化する一方で別の次元は否定的な方向に変化していることを見出している(樋口他，2005；佐久間他，2007；佐久間他，2010；高林他，2005)。そこで本研究も、これらの先行研究と同様に、国民イメージには複数の次元があると仮定して、それらの変化を検討する。具体的には、Fiske et al. (2002)のステレオタイプ内容モデルで仮定されているあたたかさ（知能）と身体能力を加えた3つの次元で国民イメージが変化するか検討する。身体能力は近年、スポーツの場面で人を表現する言葉として、しばしば使用されているものである(森田，2009)。特にアフリカや南米の地域の国民に関して表現するときに使用されていて、それらの国民に関するステレオタイプであることが指摘されている(川島，2009)。さらに国際的スポーツイベントが開催されている状況では、身体能力は重要視される次元であると考えられるので加えることにする。

W 杯南アフリカ大会の前後での国民イメージの変化を検討するという主たる目的に加えて、本研究では国民イメージを構成する複数の次元の関連についても検討する。先行研究では、ステレオタイプや国民イメージを構成する複数の次元の間には相補的な関係があることを見出している。たとえば Fiske らのステレオタイプ内容モデルによれば、あたたかさ（知能）と知的能力の次元は相補的な関係になっていることが指摘されている。そして多くのステレオタイプは「あたたかさが知的能力が低い」または「知的能力が高いがつめたい」というように、一方の次元が肯定的であるが、他方の次元は否定的である両面価値的なものになっているという。別の研究では、知的能力と身体能力の次元も相補的な関係になっていることが指摘されている。たとえば村田(2006)は、アフリカや南米地域の国民に対するイメージは知的能力と身体能力の次元が相補的な関係になっていることを指摘している。そしてこれらの国民に対するイメージは「身体能力は高いが知的能力は低い」というものになっていることを見出している。このようにあたたかさ（知能）と知的能力の次元の間、知的能力と身体能力の次元の間には相補的な関係があることが指摘されている。本研究でも、これらの次元の間に相補的な関係が見られるか検討することを第二の目的とする。

方法

調査対象者と調査の実施方法

文教大学および国際医療福祉大学で心理学関連の授業を受講している大学生を対象にW杯南アフリカ大会の開催前(以下、事前調査)と開催後(以下、事後調査)にパネル調査を実施した。

事前調査 811人(男性326人、女性484人、不明1人)を対象に、W杯南アフリカ大会の約1ヶ月前の2010年5月10日または5月13日に調査を実施した。調査は授業時間の一部を使用して実施した。

事後調査 751人(男性281人、女性467人、不明3人)を対象に、W杯南アフリカ大会終了後の2010年7月12日または7月15日に調査を実施した。⁴⁾ 調査は授業時間の一部を使用して実施した。

国民イメージの測定

対象となった国民 質問紙はイメージの対象となる国民が異なる2パターン(Aパターン、Bパターン)を用意した。調査対象者にはどちらかの質問紙に回答してもらった。⁵⁾ どちらのパターンも9つの国民に対するイメージを回答するものであった。9つの国民のうち日本人と開催国である南アフリカ人はA、Bの両方のパターンに含まれていたが、残りの7つの国民に関してはA、Bのパターンで異なっていた(具体的に対象となった国民は表1を参照)。さらに回答順序の影響を排除するために、同じパターンの質問紙の中でカウンターバランスを取った。

国民イメージの測定項目 国民イメージに関しては10個の形容詞対で回答を求めた(7件法)。10個の形容詞対は佐久間他(2010)などの先行研究を参考に用意した。10個の形容詞対のうち、「親しみやすい-親しみにくい」「好き-嫌い」はあたたかさの次元、「頭がよい-頭が悪い」「知的な-知的でない」は知的能力の次元、「身体能力が高い-身体能力が低い」「運動神経がよい-運動神経が悪い」は身体能力の次元に対応する形容詞対であった。残りの4項目(「理性的な-感情的な」「攻撃的な-攻撃的でない」「精神力が強い-精神力が弱い」「強い-弱い」)は探索的に加えた形容詞対であった。

結果

本研究ではW杯南アフリカ大会の開催の前後での国民イメージの変化を検討する。そのために事前調査と事後調査の両方に回答した調査対象者のうち日本人大学生647人を対象に分析を実施した。⁶⁾

あたたかさ、知的能力、身体能力のイメージの変化

あたたかさ、知的能力、身体能力の3つの次元に関して、事前調査と事後調査の間に差が見られるか検討した。まずそれぞれの次元に対応する2つの形容詞対の相関係数を算出した。具体的には、イメージの対象となる国民ごとに、調査対象者個人の回答を単位として、「親しみやすい-親しみにくい」と「好き-嫌い」、「頭がよい-頭が悪い」と「知的な-知的でない」、「運動神経がある-運動神経がない」と「身体能力が高い-身体能力が低い」の相関係数を算出した。その結果、事前調査および事後調査において、ほとんどの組み合わせで.20以上の正の相関が見出された。⁷⁾ そこで、それぞれの次元に対応した形容詞対の平均値を算出して、あたたかさ得点、知的能力得点、身体能力得点とした。事前調査および事後調査の、それぞれの国民に関する3つの次元の得点の平均値は

表1の通りであった。事前調査と事後調査の間で国民イメージに差があるか検討するために、3つの次元の得点に関して対応のあるt検定を行った。

あたたかさ得点 日本人($t(635)=4.11, p<.001$)、南アフリカ人($t(630)=3.81, p<.001$)、ポルトガル人($t(275)=2.30, p<.05$)、デンマーク人($t(275)=2.73, p<.01$)、フランス人($t(277)=2.33, p<.05$)、ドイツ人($t(278)=2.88, p<.01$)、スペイン人($t(350)=3.10, p<.01$)、カメルーン人($t(350)=3.62, p<.001$)、オランダ人($t(351)=3.55, p<.001$)、北朝鮮人($t(351)=3.49, p<.001$)、アルゼンチン人($t(347)=4.99, p<.001$)に関して、事前得点と事後得点の間に有意差が見られた。フランス人を除いた国民に関して、事前調査よりも事後調査の得点が高かった。つまり、肯定的な方向に変化してい

表1 事前調査と事後調査の国民イメージ得点の平均値(標準偏差)

		n	あたたかさ得点			知的能力得点			身体能力得点		
			事前	事後	t検定	事前	事後	t検定	事前	事後	t検定
A B 共通	日本人	636-638	5.05 (1.28)	5.23 (1.26)	***	4.24 (0.95)	4.45 (1.00)	***	3.59 (0.92)	3.86 (0.97)	***
	南アフリカ人	630-631	3.91 (0.81)	4.04 (0.86)	***	3.57 (0.93)	3.56 (0.87)		5.57 (1.23)	5.31 (1.19)	***
	ポルトガル人	271-276	4.15 (0.56)	4.27 (0.77)	*	4.16 (0.55)	4.18 (0.68)		4.41 (0.82)	4.56 (0.98)	*
A パ タ ー ン	コートジボワール人	273-275	3.98 (0.65)	3.93 (0.64)		3.86 (0.57)	3.83 (0.79)		4.35 (0.90)	4.46 (0.99)	+
	デンマーク人	275-276	4.22 (0.61)	4.35 (0.64)	**	4.31 (0.66)	4.43 (0.72)	*	4.15 (0.67)	4.42 (0.85)	***
	韓国人	276-279	3.95 (1.18)	4.04 (1.19)		4.23 (1.01)	4.25 (1.01)		4.00 (0.79)	4.18 (0.80)	**
	フランス人	278	4.62 (0.96)	4.49 (0.85)	*	4.63 (0.85)	4.65 (0.93)		4.43 (0.87)	4.54 (0.89)	+
	ドイツ人	278-280	4.29 (0.84)	4.43 (0.88)	**	4.62 (0.93)	4.82 (0.98)	**	4.43 (0.81)	4.96 (1.05)	***
	ブラジル人	281-282	4.19 (1.01)	4.19 (0.92)		3.72 (0.79)	3.82 (0.86)	+	5.69 (1.22)	5.65 (1.22)	
	スペイン人	349-351	4.53 (0.84)	4.66 (0.87)	**	4.22 (0.68)	4.42 (0.78)	***	4.81 (0.95)	5.20 (1.13)	***
B パ タ ー ン	カメルーン人	348-351	4.00 (0.66)	4.17 (0.80)	***	3.76 (0.69)	3.72 (0.81)		5.08 (1.20)	5.16 (1.14)	
	オランダ人	350-352	4.44 (0.74)	4.60 (0.85)	***	4.33 (0.71)	4.50 (0.70)	***	4.46 (0.88)	4.95 (1.03)	***
	北朝鮮人	352-353	2.27 (1.00)	2.46 (1.14)	***	3.37 (1.05)	3.48 (1.15)	+	3.88 (0.92)	3.80 (1.03)	
	メキシコ人	348-351	4.47 (0.77)	4.42 (0.75)		3.91 (0.66)	3.91 (0.72)		4.51 (0.79)	4.60 (0.85)	+
	イタリア人	347-350	4.83 (0.98)	4.86 (0.97)		4.58 (0.88)	4.64 (0.88)		4.68 (0.97)	4.88 (0.95)	**
アルゼンチン人	348-350	4.12 (0.65)	4.33 (0.86)	***	4.02 (0.64)	4.07 (0.85)		4.86 (1.02)	5.07 (1.09)	***	

注1) *** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$, + $p<.10$

注2) それぞれの得点の範囲は1～7。得点が高いほど、「あたたかい」「知的能力が高い」「身体能力が高い」というイメージを持っていることを意味する。

た。一方、フランス人に関しては、事前調査よりも事後調査の得点が低く、否定的な方向に変化していた。

知的能力得点 日本人($t(637)=5.54, p<.001$)、デンマーク人($t(274)=2.40, p<.05$)、ドイツ人($t(279)=3.14, p<.01$)、ブラジル人($t(281)=1.74, p<.10$)、スペイン人($t(348)=4.35, p<.001$)、オランダ人($t(349)=3.71, p<.001$)、北朝鮮人($t(351)=1.70, p<.10$)に関して、事前調査と事後調査の得点の間に有意差が見られた。いずれの国民に関しても、事前調査よりも事後調査の得点が高かった。つまり、知的能力に関しては肯定的な方向に変化していた。

身体能力得点 日本人($t(636)=6.63, p<.001$)、南アフリカ人($t(629)=4.84, p<.001$)、ポルトガル人($t(270)=2.57, p<.05$)、コートジボワール人($t(274)=1.84, p<.10$)、デンマーク人($t(275)=4.40, p<.001$)、韓国人($t(75)=3.00, p<.01$)、フランス人($t(277)=1.75, p<.10$)、ドイツ人($t(277)=8.09, p<.001$)、スペイン人($t(348)=5.71, p<.001$)、オランダ人($t(351)=7.42, p<.001$)、メキシコ人($t(348)=1.86, p<.10$)、イタリア人($t(346)=3.19, p<.01$)、アルゼンチン人($t(349)=3.48, p<.001$)に関して、事前調査と事後調査の得点の間に有意差が見られた。南アフリカ人に関しては、事前調査よりも事後調査の得点が低く、否定的な方向に変化していた。それ以外の国民に関しては、事前調査よりも事後調査の得点が高く、肯定的な方向に変化していた。

その他のイメージの変化

あたたかさ、知的能力、身体能力の次元以外の4つの形容詞対に関しても、事前調査と事後調査の間に差が見られるか検討した。それぞれの形容詞対の平均値は表2の通りであった。事前調査と事後調査の間に差があるか検討するために、4つのそれぞれの形容詞対に関して対応のあるt検定を行った。

理性的 南アフリカ人($t(632)=3.27, p<.01$)、コートジボワール人($t(275)=2.70, p<.01$)、ドイツ人($t(276)=3.37, p<.001$)、カメルーン人($t(349)=2.59, p<.01$)、オランダ人($t(351)=2.72, p<.01$)、アルゼンチン人($t(349)=4.07, p<.001$)に関して、事前調査と事後調査の得点の間に有意差が見られた。いずれの国民に関しても、事前調査よりも事後調査の得点が低かった。つまり「感情的」という方向にイメージが変化していた。

攻撃的 日本人($t(636)=2.24, p<.05$)、ポルトガル人($t(274)=2.30, p<.05$)、韓国人($t(278)=1.68, p<.10$)、フランス人($t(279)=3.25, p<.01$)、ドイツ人($t(278)=1.99, p<.05$)、ブラジル人($t(279)=3.07, p<.01$)、カメルーン人($t(349)=1.68, p<.10$)、オランダ人($t(352)=6.56, p<.001$)、北朝鮮人($t(352)=4.50, p<.001$)、アルゼンチン人($t(348)=4.15, p<.001$)に関して、事前調査と事後調査の得点の間に有意差が見られた。北朝鮮人以外の国民に関しては、事前調査よりも事後調査の得点が高かった。つまり「攻撃的」という方向にイメージが変化していた。一方、北朝鮮人に関しては、「攻撃的でない」という方向にイメージが変化していた。

精神力が強い 日本人($t(638)=8.94, p<.001$)、南アフリカ人($t(632)=1.98, p<.05$)、デンマーク人($t(275)=2.55, p<.05$)、ドイツ人($t(279)=4.25, p<.001$)、オランダ人($t(350)=5.01, p<.001$)、メキシコ人($t(348)=2.24, p<.05$)、アルゼンチン人($t(349)=2.37, p<.05$)に関して、事前調査と事後調査の得点の間に有意差が見られた。南アフリカ人以外の国民に関しては、「精神力が強い」という方向にイメージが変化していた。一方、南アフリカ人に関しては、「精神力が弱い」という方向にイメージが変化していた。

強い 日本人($t(638)=8.61, p<.001$)、南アフリカ人($t(632)=2.55, p<.001$)、ドイツ人($t(277)=3.00, p<.01$)、ブラジル人($t(280)=1.85, p<.10$)、オランダ人($t(351)=5.91, p<.001$)、北朝鮮人($t(351)$)

=2.74, $p<.01$)、アルゼンチン人($t(347)=2.91, p<.01$)、に関して、事前調査の得点と事後調査の得点の間に有意差が見られた。日本人、ドイツ人、ブラジル人、オランダ人、アルゼンチン人は「強い」という方向にイメージが変化していた。一方、南アフリカ人、北朝鮮人は「弱い」という方向にイメージが変化していた。

表2 事前調査と事後調査の国民イメージの平均値(標準偏差)

	n	理性的な			攻撃的な			精神力が強い			強い		
		事前	事後	t検定	事前	事後	t検定	事前	事後	t検定			
A		4.55	4.54		2.94	3.07	*	3.33	3.86	***	3.40	3.84	***
B	637-639	(1.31)	(1.29)		(1.22)	(1.25)		(1.30)	(1.42)		(1.01)	(1.11)	
共通		3.08	2.90	**	4.68	4.75		5.07	4.96	*	4.79	4.63	***
南アフリカ人	632-633	(1.19)	(1.16)		(1.28)	(1.24)		(1.33)	(1.23)		(1.37)	(1.24)	
ポルトガル人	274-276	3.61	3.50		4.03	4.21	*	4.38	4.46		4.28	4.47	
		(1.03)	(1.11)		(1.04)	(1.09)		(0.92)	(1.01)		(0.80)	(1.05)	
コートジボワール人	274-276	3.76	3.59	**	4.22	4.30		4.36	4.37		4.09	4.11	
		(0.87)	(1.04)		(0.87)	(1.06)		(0.92)	(0.97)		(0.82)	(0.91)	
デンマーク人	275-277	4.11	4.02		3.68	3.80		4.17	4.36	*	4.10	4.21	
		(0.94)	(1.11)		(0.97)	(1.08)		(0.89)	(1.01)		(0.75)	(0.98)	
A		3.15	3.26		4.63	4.79	+	4.30	4.41		4.10	4.19	
韓国	279-280	(1.39)	(1.39)		(1.33)	(1.31)		(1.16)	(1.26)		(0.93)	(1.00)	
フランス人	280-281	3.78	3.78		3.66	3.93	**	4.35	4.30		4.39	4.32	
		(1.32)	(1.34)		(1.18)	(1.16)		(0.99)	(1.06)		(0.99)	(1.03)	
ドイツ人	277-280	4.04	3.69	***	4.30	4.47	*	4.53	4.91	***	4.57	4.83	*
		(1.34)	(1.42)		(1.18)	(1.17)		(1.14)	(1.21)		(1.16)	(1.24)	
ブラジル人	280-281	2.89	2.84		4.63	4.92	**	5.02	5.00		4.82	5.00	+
		(1.30)	(1.39)		(1.25)	(1.30)		(1.21)	(1.32)		(1.41)	(1.37)	
B		2.89	2.97		4.39	4.75		4.61	4.96		4.61	5.07	
スペイン人	350-352	(1.41)	(1.33)		(1.22)	(1.23)		(0.98)	(1.30)		(1.08)	(1.37)	
カメルーン人	349-351	3.39	3.20	**	4.51	4.63	+	4.66	4.68		4.57	4.60	
		(1.06)	(1.18)		(1.05)	(1.17)		(1.10)	(1.17)		(1.16)	(1.07)	
オランダ人	351-353	3.87	3.64	**	3.82	4.38	***	4.34	4.72	***	4.28	4.74	***
		(1.07)	(1.27)		(1.11)	(1.31)		(0.85)	(1.21)		(0.94)	(1.28)	
北朝鮮人	352-253	2.93	2.87		5.87	5.52	***	4.64	4.62		4.08	3.86	**
		(1.67)	(1.54)		(1.19)	(1.35)		(1.55)	(1.62)		(1.27)	(1.41)	
メキシコ人	349-351	3.09	3.09		4.25	4.27		4.44	4.57	*	4.40	4.35	
		(1.16)	(1.17)		(1.07)	(1.16)		(0.92)	(0.91)		(0.89)	(0.93)	
イタリア人	349-351	3.36	3.24		3.82	3.93		4.44	4.51		4.42	4.50	
		(1.50)	(1.46)		(1.24)	(1.31)		(0.99)	(1.13)		(1.09)	(1.23)	
アルゼンチン人	348-350	3.51	3.21	***	4.26	4.56	***	4.54	4.71	*	4.54	4.75	**
		(1.07)	(1.29)		(1.12)	(1.24)		(1.01)	(1.07)		(1.08)	(1.20)	

注1) *** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$, + $p<.10$

注2) それぞれの得点の範囲は1~7。得点が高いほど、「理性的」「攻撃的」「精神力が強い」「強い」というイメージを持っていることを意味する。

あたたかさ、知的能力、身体能力の次元の関連

あたたかさ、知的能力、身体能力の3つの次元の間の関連を検討するために、イメージの対象となる国民ごとに、調査対象者個人の回答を単位として、3つの次元の得点間の偏相関係数を算出した。具体的には3つの次元の得点のうちの1つの得点を統制して、残りの2つの次元の得点の偏相関係数を算出した(表3)。

その結果、事前調査および事後調査において、多くの組み合わせで有意な正の相関関係が見られた。ただし事前調査の南アフリカ人($r=-.22, p<.001$)、コートジボワール人($r=-.37, p<.001$)、ブラジル人($r=-.24, p<.001$)、カメルーン人($r=-.35, p<.001$)、メキシコ人($r=-.10, p<.10$)に関しては、知的能力得点と身体能力得点の間に有意な負の相関が見られた。加えて事後調査の南アフリ

表3 あたたかさ得点、知的能力得点、身体能力得点の間の偏相関係数

		n	あたたかさ-知的能力		あたたかさ-身体能力		知的能力-身体能力	
			偏相関係数	有意性の検定	偏相関係数	有意性の検定	偏相関係数	有意性の検定
共通	日本人	事前調査	.30	***	.13	***	.14	***
		事後調査	.33	***	.18	***	.18	***
	南アフリカ人	事前調査	.15	***	.12	**	-.22	***
		事後調査	.25	***	.17	***	-.29	***
ポルトガル人	事前調査	.11		.21	***	.15	*	
	事後調査	.20	***	.33	***	.06		
コートジボワール人	事前調査	.03		.12	+	-.37	***	
	事後調査	.37	***	.21	***	-.29	***	
A パ タ ー ン	デンマーク人	事前調査	.16	**	.10		.06	
		事後調査	.14	*	.33	***	.30	***
	韓国人	事前調査	.45	***	.05		.21	***
		事後調査	.47	***	.07		.19	***
	フランス人	事前調査	.23	***	.16	**	.31	***
		事後調査	.28	***	.25	***	.29	***
	ドイツ人	事前調査	.19	**	.24	***	.13	*
		事後調査	.24	***	.35	***	.18	**
	ブラジル人	事前調査	-.04		.10	+	-.24	***
		事後調査	.09		.25	***	-.12	*
	スペイン人	事前調査	.15	**	.27	***	-.05	
		事後調査	.07		.32	***	.21	***
	カメルーン人	事前調査	.13	*	.15	**	-.35	***
		事後調査	.16	**	.19	***	-.24	***
B パ タ ー ン	オランダ人	事前調査	.27	***	.14	**	.18	**
		事後調査	.43	***	.13	**	.12	*
	北朝鮮人	事前調査	.39	***	.03		.21	***
		事後調査	.42	***	.07		.30	***
	メキシコ人	事前調査	.01		.23	***	-.10	+
		事後調査	.05		.27	***	-.08	
	イタリア人	事前調査	.20	***	.24	***	.12	*
		事後調査	.29	***	.19	***	.23	***
	アルゼンチン人	事前調査	.13	*	.13	*	-.03	
		事後調査	.18	***	.38	***	-.14	**

注)*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$, + $p<.10$

カ人($r = -.29, p < .001$)、コートジボワール人($r = -.29, p < .001$)、ブラジル人($r = -.12, p < .05$)、カメルーン人($r = -.24, p < .001$)、アルゼンチン人($r = -.14, p < .01$)に関しても、知的能力得点と身体能力得点の間に有意な負の相関が見られた。

考察

本研究の目的は、W杯南アフリカ大会の開催の前後で国民イメージが変化するか、さらに国民イメージを構成する複数の次元間の関連がどのようになっているか検討することであった。それぞれの結果を要約した上で考察を行う。

国民イメージの変化

あたたかさ、知的能力、身体能力に関する次元を見ると、多くの国民のイメージが変化していた。そしてその変化の大半は、肯定的な方向への変化であった。日本代表の対戦国であったデンマーク人、オランダ人、カメルーン人のイメージも肯定的な方向に変化していた。国際的スポーツイベントを通して国民イメージが肯定的な方向に変化するという結果は、先行研究とほぼ同じであった。つまり国際的スポーツイベントは概して、いくつかの国民に対するイメージを好転させるものであることが示唆される。ただし日本代表が対戦した国民のイメージがすべて肯定的な方向に変化するという本研究の結果は、前回のW杯ドイツ大会の結果(佐久間他, 2007)とは若干異なるものであった。対戦国をはじめとした諸外国人に対するイメージが肯定的な方向に変化した主な理由としては、日本代表の成績の影響があげられるだろう。高木・坂元(1991)は、ソウルオリンピック大会期間中に好成績をあげた国民は日本人に脅威を与える存在であるために、それらの国民に対して否定的なイメージを持つ可能性を指摘している。この指摘に基づいて考えると、W杯ドイツ大会と比較してW杯南アフリカ大会では日本代表は好成績をあげていたために、他国民が日本人にとって脅威を与える存在でなかったと考えられる。その結果、諸外国人に対するイメージは否定的な方向に変化せず、単純接触効果(Zajonc, 1968)により肯定的な方向に変化した可能性が考えられる。

その一方で、フランス人のあたたかさ、南アフリカ人の身体能力に関しては、事前調査よりも事後調査の得点が低く、否定的な方向に変化していた。これらの変化に関しては、それぞれの国民(代表選手)と関連する大会期間中の出来事が影響した可能性があるだろう。たとえば、フランス人のあたたかさに関する結果は、大会期間中のフランス代表のスキャンダル(フランス代表選手とフランス代表監督との確執)が原因であると推測される。マスメディアを通してスキャンダルが報道されたことにより、人柄に関わるあたたかさのイメージが否定的な方向に変化した可能性があるだろう。南アフリカ人の身体能力に関する結果は、W杯南アフリカ大会の低成績が原因であると推測される。これまでワールドカップサッカー大会では、開催国の代表が予選リーグで敗退することはなかった。それに対して、南アフリカ代表は予選リーグを突破することができなかった。こうした低成績が身体能力の低さと結びつけられたために、身体能力のイメージが否定的な方向に変化した可能性があるだろう。

あたたかさ、知的能力、身体能力の次元以外に4つの形容詞対を用意して国民イメージの変化を検討した。その結果、それらの形容詞対に関しても多くの国民のイメージが変化していた。その大半は、「感情的」「攻撃的」「精神力が強い」「強い」という方向に変化していた。こうした変化はスポーツに関する報道の影響であると推測される。たとえば「攻撃的」という言葉はサッカーのプレースタイルに言及するときに用いられるものである。「精神力が強い」はサッカーをはじめとしたス

スポーツの成績の原因を考えるときのひとつに該当するものであろう。そして「強い」は大会での成績を反映したものになっているだろう。このようにスポーツおよびサッカーに関する報道に敏感に反応する形容詞対であったために、大会の前後でイメージが変化したと考えられる。

あたたかさ、知的能力、身体能力の次元の関係

国民イメージに関する3つの次元の関連を検討したところ、大半の国民のイメージに関しては、あたたかさとは知的能力の次元、あたたかさとは身体能力の次元の間は無相関、または正の相関が見られた。同様に知的能力とは身体能力の次元の間も無相関、または正の相関が見られた。しかし南アフリカ人、コートジボワール人、ブラジル人、カメルーン人、アルゼンチン人、メキシコ人などのアフリカおよび中南米地域の国民のイメージに関しては、知的能力とは身体能力の次元の間に負の相関が見られた。つまりこれらの国民のイメージに関しては、知的能力とは身体能力の次元が相補的な関係になっていることが確認された。この結果は、村田(2006)とほぼ同様のものであった。

さらにこれらの国民の知的能力得点、身体能力得点を見ると、アルゼンチン人以外のすべての国民に関して、知的能力得点が midpoint の4点以下であり、身体能力得点が midpoint の4点以上であった(表1)。つまりこれらの国民に対するイメージは「身体能力は高いが知的能力が低い」という両面価値的なものであったと言える。この結果は、Fiske らの指摘した「あたたかいが知的能力が低い」「知的能力は高いがつかぬ」とは別に、「身体能力は高いが知的能力が低い」という両面価値的ステレオタイプが存在することを示唆するものであろう。

知的能力とは身体能力の次元の間に負の相関が見られるという結果は、社会の中で暗黙のうちに否定的な国民イメージが形成されたり、その方向に国民イメージが変化したりする危険性を示唆しているという点で重要な知見であろう(c.f., 山本, 2002)。マスメディアの報道の中では、アフリカや南米地域の国民に関して「身体能力が高い」という表現を用いることがある。こうした表現は一見、それらの国民を賞賛しているように見えるが、その背後にはそれらの国民を蔑視するような意味、つまり「知的能力が低い」というものが含意されている可能性がある。したがって、報道する側が意図しているかどうかに関わらず、ある国民に関する「身体能力が高い」という報道は、その国民に対する「身体能力が高い」という肯定的なイメージだけでなく、「知的能力が低い」という否定的なイメージにもつながりかねないのである。

今後の検討課題

最後に今後の検討課題について述べる。第一に、本研究で得られた国民イメージの変化を説明する要因を明らかにする必要がある。国民イメージの変化を説明する要因として、先行研究ではメディア報道への接触の効果(向田他, 2001; 向田他, 2007)、国家態度である愛国心、ナショナリズムの影響(藤島・佐久間・村田・大江・山下・李・キム, 2009; 村田・稲葉・向田・佐久間・樋口・高林, 2005; 佐久間・村田, 2007)が指摘されている。本論文では取り上げなかったが、メディア報道への接触、愛国心、ナショナリズムなどの国家態度に関する質問項目にも回答を求めているので、それらの影響を検討することは可能である。次稿では、メディア報道への接触、国家態度が国民イメージの変化に及ぼす影響に関する結果を報告したい。

第二に、知的能力とは身体能力の次元の関連についての問題である。ステレオタイプ内容モデル(Fiske et al., 2002; Cuddy et al., 2008)では、あたたかさとは知的能力の2つの次元の中での両面価値的ステレオタイプ(「あたたかいが知的能力が低い」「知的能力が高いがつかぬ」)が問題にされている。こうした両面価値的ステレオタイプに関しては、これまでに多くの研究が行われている(最近のレビューとしては Cuddy et al., 2008)。一方、村田(2006)や本研究で見られた「身体能力は高

いが知的能力が低い」という両面価値的ステレオタイプに関しては、まだ十分な研究が行われていない。こうした両面価値的ステレオタイプが国民イメージに関して繰り返し見られるか、さらに別の社会的集団に関しても見られるか、今後検討する必要があるだろう。

引用文献

- Cuddy, A. J. C., Fiske, S. T., & Glick, P. (2008). Warmth and competence as universal dimensions of social perception: The stereotype content model and the BIAS map. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*. Vol.40. New York:Academic Press. Pp.61 – 149.
- Fiske, S. T., Cuddy, A. J. C., Glick, P., & Xu, J. (2002). A model of (often mixed) stereotype content competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 878 – 902.
- 藤島喜嗣・村田光二・伊藤忠弘・佐久間 勲 (1998). '98W杯サッカーフランス大会による外国イメージの変化(1)－好意度と類似性－ 日本グループ・ダイナミクス学会第46回大会発表論文集, 198–199.
- 藤島喜嗣・佐久間 勲・村田光二・大江朋子・山下玲子・李 岩梅・キムジユン (2009). 北京オリンピック大会と国民イメージ(2)－愛国心、ナショナリズム、スポーツ・ナショナリズムの影響－ 日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミクス学会第56回大会合同大会発表論文集, 440–441.
- 樋口 収・村田光二・稲葉哲郎・向田久美子・佐久間 勲・高林久美子 (2005). アテネ・オリンピック報道と日本人・外国人イメージ(3)－市民調査の結果－ 日本社会心理学会第46回大会発表論文集, 610–611.
- 黄 允一・日吉昭彦 (2009). 北京オリンピック前後における視聴者の対中国意識調査1～インターネット調査の結果報告～ 武蔵大学総合研究所紀要, **18**, 7–28.
- 上瀬由美子・萩原 滋 (2003). ワールドカップによる韓国・韓国人イメージの変化 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要, **57**, 111–124.
- 上瀬由美子・萩原 滋・李 光鎬 (2010). 北京オリンピック視聴と中国・中国人イメージの変化－大学生のパネル調査分析から－ メディア・コミュニケーション (慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所), **60**, 67–88.
- 川島浩平 (2009). 「黒人身体能力神話」浸透度の文化的格差を探る－概念規定と方法論を中心に－ 武蔵大学人文学会論集, **40**, 1–29.
- Luo, Q., Chwen, C. C., Cinzia, C., Hiyoshi, A., Hwang, Y., & Kodama, M. (2010). Attitudes toward China before and after the Beijing Olympics. *The International Journal of the History of Sport*, **27**, 1419–1432.
- 森田浩之 (2009). メディアスポーツ解体 <見えない権力>をあぶり出す 日本放送出版協会
- 向田久美子・坂元 章・村田光二・高木栄作 (2001). アトランタ・オリンピックと外国イメージの変化 社会心理学研究, **16**, 159–169.
- 向田久美子・坂元 章・高木栄作・村田光二 (2007). オリンピック報道は外国人・日本人イメージにどのような影響を与えてきたか－シドニー・オリンピックを中心に 人間文化創成科学論叢, **10**, 297–307.
- 村田光二 (2006). 「高い身体能力」は偏見の表明か?－外国人イメージにおける知的能力次元と身

- 体能力次元の関係の検討－ 日本心理学会第70回大会発表論文集, 75.
- 村田光二・稲葉哲郎・向田久美子・佐久間 勲・樋口 取・高林久美子 (2005). アテネ・オリンピック報道と日本人・外国人イメージ(1)－愛国心, ナショナリズム尺度の検討－ 日本社会心理学会第46回大会発表論文集, 64－65.
- Sakamoto, A., Murata, K., & Takaki, E. (1999). The Barcelona Olympics and the perception of foreign nations: A panel study of Japanese university students. *Journal of Sport Behavior*, **22**, 260－278.
- 佐久間 勲・藤島喜嗣・高林久美子 (2007). ワールドカップサッカー・ドイツ大会と日本人・外国人イメージの変化－好意度と能力の変化－ 日本グループ・ダイナミクス学会第54回大会発表論文集, 212－213.
- 佐久間 勲・村田光二 (2007). ワールドカップサッカー・ドイツ大会と日本人・外国人イメージの変化－愛国心とナショナリズムの影響－ 日本社会心理学会第48回大会発表論文集, 792－793.
- 佐久間 勲・ハッ橋武昭・李 岩梅 (2010). 北京オリンピック大会と国民イメージ(1) 情報研究 (文教大学情報学部), **42**, 23－30.
- 高林久美子・村田光二・稲葉哲郎・向田久美子・佐久間 勲・樋口 取 (2005). アテネ・オリンピック報道と日本人・外国人イメージ(2)－学生調査の結果－ 日本社会心理学会第46回大会発表論文集, 608－609.
- 高木栄作・坂元 章 (1991). ソウルオリンピックによる外国イメージの変化 大学生のパネル調査 社会心理学研究, **6**, 98－111.
- 山本敦久 (2002). 見えるもの／見えないもの－W杯、メディア、「人種」 月刊言語, **31**(13), 54－57.
- Zajonc, R. B. (1968). The attitudinal effects of mere exposure. *Journal of Personality and Social Psychology Monographs*, **9**, 1－27.

註

- 1) 本研究は2010年度文教大学競争的教育研究支援資金による研究成果の一部である。
- 2) 本研究の実施にあたり横井 俊先生(国際医療福祉大学非常勤講師)にご協力いただいた。記して感謝する。
- 3) 本研究の一部は日本グループ・ダイナミクス学会第58回大会にて発表された。
- 4) W杯南アフリカ大会は日本時間の2010年7月12日の早朝に決勝戦が終了した。
- 5) 文教大学および国際医療福祉大学の5つのクラスの受講生を調査対象者としたが、そのうち2クラス(文教大学1クラス、国際医療福祉大学1クラス)にAパターン、残りの3クラス(文教大学1クラス、国際医療福祉大学2クラス)にBパターンの質問紙に回答してもらった。
- 6) 事前調査と事後調査の両方に回答した調査対象者のうち4人は留学生であったために分析からは除外した。
- 7) 形容詞対の相関係数が.20に満たなかった組み合わせもいくつか見られた。ただし負の相関係数が見られた組み合わせはなかった。そこで相関係数が.20に満たない組み合わせに関しても2つの回答の平均値を算出して、それぞれの得点を算出した。

